

〈翻訳〉

A Song for Every Season (3)

湯 山 健 一

【5月】

「また1年が巡って春を迎え、心地好き5月が訪れると、
向かいの草地の裾を流れるせせらぎは澄み渡り、
小魚たちのはしゃぎ戯れる姿が浮かび上がる
すると若者たちは、男も女もこぞって干し草作りに取りかかる。」
「心地好き5月（‘Pleasant Month of May’）」

「心躍る月（merry month）」と形容される5月は、古来、詩を吟じる者や歌を紡ぐ者たちの想像力を大いに掻き立ててきました。草の青々と生い茂るこのような丘の上を、実際に「5月のある朝、歩いて（‘walk out one May morning’）」^[訳注]民謡に定番の歌い出しのひとつ。5月を時節の設定とする歌は他の月に比べ群を抜いて多い。]みれば、その理由は明々白々でしょう。夜明けの光は、力漲る脚の長い雄の子馬のように、丘の稜線全体に勢いよく伸びていきます。早朝の薄明かりに照らし出された畑はまるでパッチワークのようで、周囲の丘にはフリントの埋め込まれた石垣が曲がりくねり、白亜の道が白いリボンのように延びていく。このすべてが、目の眩むほど鮮やかな色彩で視界に飛び込んで来るのです。そんな光景には、一年のうちでもこの時期にしかお目にかかることは出来ません。丘の頂へと足を運べば、歌声を奏でながら朝のそよ風に舞う10羽ほどのヒバリたちが、あたかも空中に

静止しているかの如く頭上に浮かんで見せたかと思えば、まるで小さな丸石が澄み切った夏の海の奥底深くへ渦を描いて沈んでいくかのようによくりと上昇し、青空の彼方へ消えて行ってしまうことでしょう。

海水を含んで重くなった空気のせいで、あたかもシャンパンの酔いが回ったときのような上気した感覚を憶えるようになると、いよいよ期待と樂觀に満ちたときの到来です。一年を人生に喩えるなら、この時節はまだあどけなさを残しながらも大人として生きていく力を蓄えつつある頃でしょうか。日はますます高く、真昼の陰を日に日に短くしていきます。大地に根を張るありとあらゆる植物にはその隅々に至るまで活力が横溢し、漲る樹液はハリエニシダの茂みを金色に染め、若枝は言うに及ばず、節くれ立った一番の古枝に至るまで緑の飛沫を吹きかけたかの如く彩っていきます。路地脇の背の低い生け垣には、酒好きの男の頬髭ほおひげに付いたビールの泡のように野芹のぜりがびっしりと生えています。畑地を覆う草はその背丈と重みを増し、やがて、私たちが唄い継いできた歌のひとつに描かれる、あの作業の時期を迎えるのです。

「…大鎌抱えた農夫らが、畑地の草を刈りに来る、
使い込んだ革張りの瓶に褐色に輝くエールをなみなみと注ぎ込んで。
腕たぐまに覚えの逞しい男たちが大勢集い、その技を見せつけんと、
ただひたすらに草を刈れば、息も切れるし、汗も吹き出す。
乾いてカラカラの草を刈り進めれば、農夫の喉もカラカラよ」。

[訳註 ‘Pleasant Month of May’ の一節]

私の父ジムが幼かった頃、干し草作りのための草刈りはまだ手作業で行われているところもあったようです。午前6時を迎える頃、大鎌を肩に担いだ6人から8人ほどの男たちと、生け垣の周りの草を刈ったり畑の隅の方をきれいに除草するための鍵型の刈り鎌 (swop-hook) [訳註 = swap hook = sickle] を担いだ2、3人の少年たちの一団によって、野の静寂は破られました。大人たちはそのほとんどが、毎年必ずこの時期にお目見えする日除け

の麦藁帽子を被っていました。ピディンハウから草刈りにやってきた「ダスター（‘Duster’）」のオヤジさんは、ブライトンのトラファルガー通りで2ペンス半をはたいて買ったという麦藁帽子を被っていました。これはオヤジさんにとってはなかなか値の張る買い物だったらしく、齢を重ねるその頭を日光から守り続けてもう40回目の夏を迎えていましたし、長持ちさせようと自分でニスを塗ったため焦げ茶色に変色していましたが、依然状態は良好で、この先も毎年、干し草作りの時期に使い続けたとしても、優にオヤジさんより長生き出来そうなほどでした。

男たちは上着とチョッキを脱ぎ捨てると、畑の境を示す生け垣の下にある深い草むらの涼しい陰に、昼食の入ったバスケットと一緒にしまい込みました。そして、いつものようにまずは鎌の刃先を「磨き上げ」、それからゴルファーが実際にボールを打つ前に、ボールがあると仮定して素振りをするのと同じ要領で、畑の脇に生えたイラクサに1、2度試しに刃先を強く振り下ろして準備万端となると、シャツの袖をまくり上げ、両の掌につばを吐いてよく擦り合わせてから、草地に横一列に並んで作業を開始しました。

作業のペースを定める団長は、隊列の先頭を切って草を刈り、次の男がその隣で一刈り分の幅を取って一步遅れるかたちでこれに続き、その次の男はそのまた隣で一步遅れてと、全員が一定の間隔で斜めにずれて草刈りの作業を進めていきました。朝露で草が重くしなっているようなときには、草が乾き切るまでしばらく待ちました。というのも、乾いた草の方が切れ味良く刈ることが出来ましたし、待っている間に、手入れのため各々持ち歩いていた砂岩の砥石を使って刃先をより鋭く研いでおくことが出来たからです。しかし、長時間待つということはありませんでした。何しろ一瞬たりとも時間を無駄にはしたくありませんでしたし、涼しい朝のうちに刈れるに越したことはありませんでしたからね。草刈りは、5月であっても昼頃には暑さのなかでの作業となることがあります。彼らはズボン吊りを肩から外し、腰から下に丸くぶら下げた状態で前屈みになり、大鎌を一心不乱に、尚且つしっかり

と規則的に振りながら、畑を一步ずつ前に進みました。その後ろには刈られた背の高い草が一刈り分ずつ地面の上に残されていき、辺りには刈ったばかりの草の甘く瑞々しい香りが漂っていました。作業が進むと、彼らは「刃先を研ぐ」ために一定の間隔で立ち止まりました。団長が腰を伸ばして身体をほぐすと、全員がこれに倣い、スニース (sneath) [訳注 = snath] と呼ばれる大鎌の持ち手の端を地面に置き、刃の部分が一番上に持って来て刃の先端を自分の反対側に向け、刃先全体に、まず片面を、次にもう片面をとという手順で、皆で合わせて一斉に砥石をかけました。こうして砂岩の砥石を鉄の刃に擦りつける音は、朝の空を突き抜けるように響き渡り、頭上のヒバリたちは皆、まるで声を振り絞り、精一杯の歌声でこれに応じているかのようでした。草刈りは重労働でしたが、農夫たちのなかには、時折歌の一節を口ずさむ者もいました。

「さて、種蒔きが終わるとお次は干し草作り、
大鎌や熊手やピッチフォークで草道をきれいに片付けるんだ。
草を刈っては運び出す、
青々と茂っていた草も、
一度刈られりゃ干し草に呼び名が変わるって訳よ」。

[訳注 ‘The Ploughshare’ の一節]

午前の作業も半ばにさしかかると、少年たちは農場の母屋へ遣いに出されます。2ガロン入りの陶製の大きな瓶 (stone jars) [訳注 大型の円筒状陶器で、石製ではない。通常はコルク等で栓が出来るよう注ぎ口は小さく作ってあり、畑仕事の合間などは、片手で抱えて直に口をつけて飲むことも多かった。] に入ったビールを銘々抱えて戻って来ると、お待ちかねの休憩時間です。土手のサンザシの木陰に腰を下ろすと、各々帽子を頭の後ろにずらしたり脱ぎ捨てたりしては、おなじみの紅白水玉模様のハンカチで額や頭の汗を拭きます。そして、ビール瓶が手から手へ一回りすると、せえせえと息を切らした

り、大きく息を吐き出す音があちらこちらから聞こえて来ました。何しろ、順番に瓶を抱え上げ、カラカラに乾ききった口へとビールを流し込み、汗によって失われた水分のうちいくらかを取り戻し生気を与えてくれる、あの風味豊かな液体を身体に取り込んだのですからね。「はああ！」と唸ると、フォッジのオヤジさんは、「これがねえとやってらんねえな」と言い、隣の男に「草刈り気付け用の油 (scythe-oil)」^{〔訳註 ここではビールを指す。〕}の入った瓶を渡しながらか、舌鼓を打ち、手の甲で頬髭を拭っては満足げに大きく息をつきました。休憩時間が終わると彼らは仕事に戻り、機械のように正確なタイミングで、ゆっくりと、しかし着実に、草刈りの仕事を片づけていきました。

草刈りの時期は日が長く、気温も上がって辛いものでしたが、このような年輩の者たちも含め、男たちは草をすべて刈り終えてしまうまで来る日も来る日もひたすら作業を続けました。彼らには仕事を嫌がるようなところはまるで無く、むしろ小遣い稼ぎの機会が得られて喜んでいる風でした。12時間から14時間もの間、草刈りの作業を行った後でも、彼らはまだ澁刺^{はつらつ}としていて、ウインドミル・ヒル (Windmill Hill)^{〔訳註 村の陸標のひとつである黒い風車のそびえ立つ西の丘 Beacon Hill の通称〕}の向こうに日が沈んでその姿が見えなくなってしまった後ですら、帰路につき村へ向かう道すがら、歌を唄ったり冗談を言い合ったりするだけの力を余していました。丸一日働いて彼らが手にしたものは、「汗びっしょりのシャツ1枚と現金1シリング (‘a wet shirt and a dry shilling’)」でした。

後年、ジムが駆け出しの車力として働いていた頃、草刈りの作業にも機械が導入されました。父はこう記しています。

刈った草を一気にかき集めるヘイ・スウィープス (haysweeps) とか、大型の熊手で脇へ一列に纏めていくサイド・デリバリー・レイク (side-delivery rake) みたいな機械なんて、あの頃はまだ無かったからな。「タンブル・ダウン・ディック (‘tumble-down-dick’)」^{〔訳註 地域によって}

tumbling tommy sweep や tumbling tam など様々な呼称があった。] を使って干し草を列にしていくもんだった。そいつは馬に引かせて使う、言ってみゃ上下ともに歯の並んだ櫛みたいなもんで、ガキがひとり、そのでかい熊手みたいなもの後ろをついて歩くわけよ。その熊手の真ん中の軸には取っ手が二つ付いててよ、ガキはその取っ手を握りながら歩いて、そこに仕込まれた留め具2つのうち片方を留めておくことで熊手の歯を下向きにしておき、もう片方で歯を持ち上げるのさ。熊手がかき集めた草で一杯になったら遠い方の留め具を放し、手前の留め具で歯を持ち上げる。これを繰り返していくわけだ — 右で捕まえ、一杯になったら外すってな。一日続けりゃ、「ディック」の後ろにゃよじ登れるぐらいの草の山の列が出来てって、そんな頃にはもうくたくたよ。集めた草は2頭立ての馬車うずたかに積まれて納屋の前庭まで運ばれてって、その壁へ向けて堆く積み上げられていった。あとから納屋へしまって、冬の間、羊に食わせるんだ。

干し草作りの作業は、午前6時半に始まって午後7時まで続いた。昔は5時になるとビールとか晩メシとか「ダウドウルズ（‘dowdles’）」なんか振る舞われたんだそう。ダウドウルズってえのは質素なロールパンみたいなもんで、親父に言わせりゃ、焼きたてならいいが、1日でも経ちまうと2つ目に手を伸ばす奴なんぞいねえって代物らしい。まあ、そういうのもオレが働き始める前の話で、だんだんそんなもてなしの代わりに酒代ってことで1日につき8ペンスが払われるようになった。で、百姓の日給は2シリング2ペンスになったってわけよ。百姓の週給はその頃13シリング — 日給換算で2シリング2ペンスだな。

そう言えばジムの誕生日は干し草作りの頃でした。父は人並みに勤勉で誠実な人物ではありましたが、日によっては仕事に背を向け、あくまでも自らの責任において普段とは何か違ったことをする特別な機会を設けることも嫌いではありませんでした。そのうえ、万一こうして仕事をさぼったことがばれた場合、ちょっとした嘘で言い逃れをするのが苦になる方でもなかったようです。

ある年の誕生日の朝、本人の記しているところによれば、父は「鼻腔に滑

り込んできたホップの香り」で目覚めたのだそうです。その日の仕事は、ジョン・ゴデンズともうひとりの車力と一緒に、ハニーソックスにある10エーカーの畑地の草を刈るというものでした。ジムは2頭の馬を連れて厩を出ると、現場へ向かう前に遠回りをして、ハイ・ストリートにあるブラックホース
 [訳注 ジムの叔父トミーが経営するパブ] の前に馬を止めました。同じく車力をしていたトミーはいつでも早起きで、早朝から店に出て、午前6時半にもならないうちから営業出来るようにドアが開けてありました。ジムは馬たちを表に留めると店に入り、早速トミーと一杯やり始めました。父に言わせれば「準備運動（‘pipe-opener’）」なのだそうですが、ともあれ、ジムはトミーに丘の上まで持って行くからと1ガロンの陶製の大瓶を渡し、これにビールを一杯に注いでもらいました。瓶を受け取ると、ジムは2頭のうちの1頭にまたがり、^{くびき} 軛に自分の上着とビールの入った瓶をぶら下げ、もう1頭の手綱を引いて現場へと向かいました。美しく晴れ渡った朝で、日はすでに高く、焼け付くように暑い日になることはまず間違いありませんでした。ゴトゴトチリンチリンと音を立てながら曲がりくねった白亜の道を登っていると、ジムはまるで「大空を飛び回る小鳥たちのように幸せな気分」になり、さすがに鳥たちほど心地好い歌声とは行かなかったでしょうが、元気の良さでは負けず劣らず、こんな歌を唄いました。

「朝は輝き空は澄み
 海原は風ぐ。
 メアリーが島の^{すみか}住処を後にして、
 オレと^{さまよ}彷徨っていたときのこと」。

[訳注 ‘Rose of Allendale’ の一節]

現場に着くと、ジムは先に来ていた二人に挨拶をし、とりあえず持参した瓶の中身を一杯やろうと声をかけましたが、酒を飲むには早すぎると二人には

きっぱり断られてしまいました。ジムには早すぎるという感覚はありませんでしたので、言うが早いかコルク栓を外すと、自分の主張を通して見せ、それからジョンとともに草刈りに取りかかりました。二人の操る2頭の馬は、一心不乱に機械を引いて草地を絶え間なくぐるぐると回りましたので、緑の草が生え残った部分は少しずつ小さくなっていきました。草地を一周巡ると、去年刈って積んである干し草の山のところへ戻って来ます。そこには、もうひとりの車力しつらが設えた、機械の刃を研ぐための台がありました。その上にジムは昼ごはんの入ったバスケットとビールの瓶を置いていましたから、ここへ戻ってくる都度、ジムは機械を飛び降り、走ってビールを一口飲みによって来ました。ところが、9時になる頃にはこれが無駄足になってしまいました。最後の一滴まで飲み干してしまったのです。一周巡るごとにビール瓶のところへ走るといふ楽しみを失ったジムは、少々やる気を失い、作業に飽きてしまいました。満たされぬ心とは誘惑の種にもってこいの肥沃な土壌となるものです。かくして父は、本人の言葉を借りると、「ジョン・バーリーコーン (John Barleycorn) 〔訳註 ビールの擬人化。民謡のタイトルとしても知られる。〕 が天から差し込む一条の日の光をするすると滑り降りて来て、その指を折り曲げ、『ジム、こっちだ』って手招きするもんだから」、機械を草地の脇へ移動させて止めてしまいました。そして、悪知恵を巡らすと機械から刃を外し、野積みされた去年の干し草の奥深くに隠して、一緒に作業をしていたジョンに、もしうちの親父がやって来てジムはどこへ行ったのかと尋ねられたら、機械の刃が欠けてしまったから直してもらうために鍛冶屋へ行ったと答えてくれと頼んだのでした。なんともまあ、当時農場管理人 (bailiff) を務めていたジムの父〔訳註 = James 'Brasser' Copper のこと。ポプの祖父。〕 どころか、誰ひとり騙されそうにない陳腐な嘘を言い残すと、ジムは帽子を目深に被り、少々悪ぶった素振りでズボン吊りのバックルにマーガレットを一輪挿して颯爽と馬にまたがり、丘を越えてピディンホウへと向かいました。ロイヤル・オークに着くとビールを1パイント頼んで、昔なじみの「シャド

(‘Shad’)」・アトリルはいるかと尋ねました。店の主人が、「あいつならちよいとロドメルへ羊の毛刈りの手伝いに行ってるよ。」と答えると、ジムは、「そっか。じゃあこの瓶を一杯にしてくれ。これ持ってあいつを探しに行って来らあ。」と言ったのでした。

ジムは、ロドメルの納屋で「50頭」ほどの羊を相手に忙しく毛刈りをしていくシャドを見つけると、予備の毛刈り鋏を手にとって作業を手伝い始め、記録的な早さで仕事を終えてしまいました。その頃には、瓶はまた空っぽになっていましたから、2人はロイヤル・オークに戻り、その日は残りの時間をずっとそこで、ビール好きの飲み助だけれど羊毛刈りには熟練の腕前をもつ、長いつきあいのたくさんの友人たちと、かつてやった悪戯などの昔話に花を咲かせ、いつもの冗談を言い合って大笑いし、いつもの歌を唄って過ごしました。結局ジムは、月明かりを頼りに馬にまたがり丘を越えて家路につくことになり、馬たちを厩へ戻す頃には、教会の鐘が夜の12時を告げていました。

干し草を取り込んで積み上げる作業は、これに最適な好天の続く間に速やかに行わなければなりませんので、これくらいの規模の農場〔訳注ロツティンディーンの中心部から最も近い大農場、コート・ファームを指す。〕の場合なかなか大変な作業でした。そのため、毎年この時期には臨時でたくさんの働き手が雇われましたが、そのうち何人かはブライトンからやって来ていました。この常連の面々のなかにひとり、ジョンという名の年輩の男がおりました。彼は典型的な路上生活者で、宿無しですから1年の大半はパレス・ピアの下で寝起きをし、外で眠るには天候が過酷な冬の間だけは救貧院に行くという暮らしをしていました。昼ごはんの入ったバスケットを持ち歩くということなど一切無く、何かしら食べるものを持っていたとしても、海岸沿いに立ち並ぶホテルの裏にあるゴミ箱から漁ってきたパンの耳を1つ2つといった具合でした。何しろ金が入れば全部ビールに使うという人でしたからね。しかし、あるとき彼は、私の祖父をうまくペテンにかけました。彼

は他の面々とコート・ファームで干し草を積み上げる作業を行っていました。夕食のため作業が中断され、休憩に入ったとき、彼も皆と一緒に腰を下ろしましたが、何も食べるものを持っていませんでした。しばらくして祖父が農場の方へ歩いてくるのが目に入ると、彼は自分が作業中に使っていたピッチフォーク (prong) を掴み、おこぼれに預かろうと食事時に必ず姿を現していたこの農場の猫のうち1匹に殴りかかり始めたのです。彼は猫を追い、狂ったようにそのふさふさした毛に殴りかかりましたが、猫は高く跳ねて、仕舞いには壁の向こうの教会の方へと消えていきました。「おいおい、ちょっと待て」と、祖父ブラッサーの大きな声が響き渡ります。「猫にケガさせるんじゃないよ、ジョン」。するとジョンは、「ケガさせようってんじゃないんですよ、コパーの旦那。あのくそつたれ、殺しちまわなきゃならねえんですよ。おいらのメシを全部食いやがったんでね」。「なんだって。そりゃひでえな。」と返した祖父は、ジョンを哀れに思いましたので、「じゃあ、ちょいとオレン家に行って、かみさんに何か食わしてもらって来い。」と言いました。ジョンはそそくさと祖父の田舎家へ向かい、祖母から熱々のミートパイに温野菜というおいしい料理ばかりか、ジョッキ一杯のビールまで振る舞ってもらいました。彼にとっておそらくこれは、何年もの間、口にしたことのない最高の食事であったことでしょう。

【6月】

「さあ、陽気な野郎ども、張り切って行こうじゃないか、
旦那方の農場巡って羊毛刈りだ。子羊も雌羊もぜんぶ刈っちゃうぜ。
毎年決まってこの6月に、
子羊も雌羊も皆、毛を刈る季節がやってくる。
そしたらオレたち曲げた腰が言うこと聞かなくなるまで仕事に励む。
ダレちまったらすぐ農場の旦那がビールを振る舞ってくれるしな。」
「羊毛刈りの歌 ('Sheep-shearing Song')」

ロッティンディーンは、かつて羊毛生産のまさに中心地でした。18世紀後半、ルイス近郊の村、グラインドのジョン・エルマンが、後世に広く名を轟かせることとなるサウスダウン種の羊の繁殖を初めて手がけたのも、幾重にも折り重なるこの辺りの丘でのことでした。東はビーチヘッドから西のステニングへと間断なく連なるサウス・ダウンズ一帯が主な牧羊地域で、緩やかに起伏するこの広大な草地の丘陵地帯に、一時はおよそ20万頭の羊が放牧されていると言われていました。羊たちは首から鈴をぶら下げていましたから、丘を歩けばどこにいても、あの音程の定まらない、なのに何故か深く心に刻み込まれる独特の鈴の音が耳に届きましたし、白亜の丘を覆う瑞々しい草は、羊たちによって地面すれすれのところまできれいに食い取られていました。途方もない数の食欲旺盛な羊たちに食べ尽くされてしまうまいと、この近辺の丘の植物は、低地の水辺に広がる牧草地で伸び放題に青々と茂る、環境に恵まれた親戚筋の植物とは異なる小さな種として進化を遂げてきました。しかし、マツムシソウやホタルブクロ、キバナノクリンザクラ、イトシャジンなどは、背の低い植物ではありますが、他の牧草と同じ運命を辿ることとなったようで、ワイルドタイム、シャジクソウにクローバーや、香りの良い丘陵地の芝などとともに、あごの小さなサウスダウン種の子羊たちがなんと水分と養分を得て成長していくのに大きな貢献を果たしてきました。ただ、茎のないオオバコや地面に張り付くアザミだけは、葉が土の上に平たく広がっているため、この丘で放牧される羊たちの栄養分となる運命からは逃れることが出来たようです。

南部の丘陵地帯は、ロッティンディーン周辺で最も大きく広がっており、ウィールド地方 (the Weald) ^{〔訳註〕} イングランド南東部の総称 全体を見渡すことの出来る北の断崖から南に開けた海を臨む岸壁までは、およそ7マイルもの隔りがあります。テルスコウムとサウスイーズの間に延びる長い谷は、羊たちが非常に密集して飼われている場所でしたので、地元では「羊肉舎 (Mutton Barracks)」と呼ばれていました。ロッティンディーン農場

だけでも、すべて合わせるとおよそ3千頭にも上るたくさんの羊の群れが飼育されていましたので、周囲の丘一帯から羊たちのもの悲しげなメーメーという鳴き声が、夜明けから夕暮れまでずっと村の方まで聞こえていました。丘の急な斜面中腹には、羊たちの通った痕跡で畝が出来ており、生け垣や針金を渡したフェンスには羊毛が付着していました。丘陵地を吹き抜けるそよ風は羊の匂いを運んで来ましたし、通りに面したドアを閉め忘れなどすれば、自宅の居間に羊がいるというようなこともありました。

羊飼いたちが別の牧草地へ移動するのに、羊の群れを引き連れて村を通り抜けるときには、まるで村全体を飲み込む洪水のような勢いで毛むくじらの侵入者たちが流れ込んで来ました。それはあたかも、瞬く間に転換する舞台の早変わりりの場面のようなものでした。夏の日午後の午後、村の通りは修道院のような静けさに包まれ、生き物の気配と言え、僅かしかない木陰に寝そべる雑種の犬が数頭と、パン屋の店先に並ぶフリード・ケーキ (flead-cake) 〔訳註 ケントの郷土料理のひとつで tea cake の一種。flead cake とも綴る。〕 の上を飛び回るスズメバチ (wasps) 〔訳註 サセックスの方言では Wapses とも呼ばれる。〕 くらいでしたが、これが突如として縁日のような活気と賑わいを見せるのです。ハイ・ストリートは羊たちでぎっしりの状態になりましたから、そこを通り抜けるには壁伝いに羊の背中の上を歩くしかありませんでしたし、もちろん、通りに面した家や店のドアはバタンバタンと大急ぎで閉められていきました。実際、牧羊犬たちは密集した羊の背中に飛び乗り、その上を走り回りながら、前方の列にいる羊たちにもう少し速く進むよう急かし吠え立てていました。メーメーという無数の羊たちの鳴き声とその首にぶら下がる鈴が奏でるカランカランという音、群れを追う男たちの大きな声、牧羊犬の吠え声や、何千という蹄が地面を踏みつけたり擦ったりする音などで、眠気を催すほどの村の静けさは完全に打ち破られました。しかし、あたかも海岸に打ち寄せる波の如く、犬たちの吠え声も羊たちの鳴き声も、羊を追う男たちの大声も賑わいも、こうした激変が訪れたのと同じぐらいの早さ

で瞬間に遙か彼方へと消えて行ってしまい、通りは以前とまったく変わらぬ姿に戻りました。いや、もしかすると同じ姿に戻ったというのは間違いかも知れません。羊たちが通った痕跡は路面にも歩道の上にも大量に残されていましたからね。ただ、こうした痕跡は、ショベルとバケツを抱えて出て来た働き者の奥さんたちや子供たちの手によって素早く片づけられました。自宅の前の通りを清潔かつ衛生的にするためというよりは、むしろ集めたものを裏庭の家庭菜園の肥やしとして活用することこそ、その大きな目的なのでした。

6月は、牧羊に携わる者にとって1年のうちで最も忙しい月のひとつでした。出産期のように神経をすり減らすような時期ではありませんが、体力を消耗する重労働という点では突出していました。まずは羊たちをすべて殺虫液に浸したり洗浄したりするところから取りかからなければなりません、これだけでもロッキンディーンのような大規模の農場などでは大変な作業でした。浸し洗いが終わると、今度は最大の仕事、羊毛刈りが待っています。1頭の羊の毛を、おなかも背中も一繋がり、なおかつ最大限の重さに最小限の時間で刈り上げるのは、決して容易^{たやす}い仕事ではありませんでした。これは長い年月をかけて培われた技術でしたので、当時でも本当に優れた刈り手はとても限られていたようです。そのため、「子羊も雌羊もぜんぶ毛を刈ちまう季節がやってくる」と、腕の良い刈り手の一団が結成され、出来高払いの仕事として一定の地区内にある農場を一つひとつ泊まりがけで回っては、順番に各農場の羊の毛をすべて刈っていくのでした。ロッキンディーン地区で結成された一団は、その受け持ち範囲に、ブルクサイド・カントリーとして知られていた領域のうちニューヘヴンからルイスに至るウーズ川の谷間^{たにあい}の西側に位置する「ブルク・ファームズ (brook farms) [訳註 文字通り川の畔の農場群]」すべてが含まれていたことから、ブルクサイド・シアラーズを自称していました。一団の構成は、帽子に星印を2つ付けた団長が1名と、星1つの副団長が1名、羊毛刈りの腕と長時間に亘って粉骨砕身作業を続け

ることの出来る強い意志を有した者として選ばれた12名から14名ほどの男たち、それに加えて、刈られた羊毛を丸めて積み上げていく役割を担う者が1名と、もうひとり、例えば刈り手が誤って羊の肌を傷つけてしまったようなとき、傷口にハエが^{たか}集るのを防ぐため軽くタール (tar) [訳註 殺菌剤として当時広く用いられていた。] — 後年は粉状の石灰の場合も — を塗って止血するなど、あれやこれやと刈り手の大人たちに呼び出されては用事を言いつけられるター・ボーイ (tar boy) が1名という格好でした。

私にとって大叔父に当たるトミー・コパーは、ブルクサイドの一团のなかでも最も名高い団長のひとりでした。大叔父は刈り手として有能であったばかりでなく、団の面々に愛され、尊敬を集めた人物でもありました。その両肩には、羊毛刈りの旅程全体を編成し、どの農場にいつ出向くかを調整し、毛を刈ることになる羊の群の規模を見定め、支払われる賃金をはじめ羊の頭数や滞在期間に応じて必要になるであろうビールの量を推計するなど、その他の重要事項の詳細について交渉を行うといった重責が負わされていました。さらに、トミーは一团の出納係でもありました。大叔父はこの界限では名の知れた刈り手で、あるときなどは副団長のフォッジ・ゴデンズを伴ってロツティンディーンから14マイルほど離れたハムゼイの農場へ歩いて出向き、2人でテグ (teg) [訳註 1歳の羊。1歳になるまでを子羊 (lamb) と称し、これと区別する。] 65頭の毛を刈った後、その日のうちに歩いて戻ってきたのだそうです。これもまた団長であった大叔父の自慢の種でしたが、団を率いて朝の作業を始める際にはいつでも、他の面々が全員羊を1頭ずつ捕まえて作業小屋に入り、毛を刈り始めたのを確認してから自分は羊を捕まえに行き、なおかつ誰よりも早くその日の1頭目を刈り終えるという名誉を手にするものだったそうです。何とか打ち負かそうと挑みかかる者は、とりわけ私の父ジムと同じ世代の若者たちに多かったようですが、年季の入ったトミーは、一度たりとも後塵を拝することはなかったそうです。ジムもこの団の一員で、ここで初めてロドメル「シャド」・アトリルに出会ったのでした。シャド

は以前、私にこんな話をしてくれました。「羊の野郎を日に40刈りゃあ上出来だろうな。ま、オレは50刈ったことがあるがね」。これは電動式のバリカンが使われるようになる前の話です。当時、彼らが使っていた鋏は手動のもので、とりわけ長時間作業を続けるような場合には、手首に非常に大きな負担のかかる代物でした。手練れの刈り手ですら、羊毛刈りの旅程が始まる最初の数日は筋肉の張りを感じたようで、右手首には頑丈な革製のストラップを巻いて作業を行っていたそうです。

羊毛刈りの時期がやってくると、彼らは皆で予定を合わせて本部と定めたパブに集まりました。ルイスのレッド・ホワイト・アンド・ブルー・インが、長年、彼らにとっての本部でした。毎年恒例の初日の会合は、ホワイト・ラム・ナイト (White Ram Night) として周知されており、団長が、「まず月曜、ニューヘヴンのウィレットンとこから始め、火曜はノースイーズへ上がってステイシーの旦那のところ。水曜はキングストンのハドソンのとこで」云々と旅程を読み上げる些いささか形式的なものでした。ジムに言わせると、「誰もろくに聞いちゃあなかった」のだそうで、「ただのややこしい長話よ。唄ってた奴もいりゃあ、若いねえちゃんを引っかけに出て行きたくてうずうずしながらひたすら話が終わるのを待ってた奴もいたし、そもそもそこに居ねえってことだってあった」のだそうです。旅程の説明が終わると、団長は罰金のリストを読み上げ、徴収された罰金については、羊毛刈りの行程をすべて完遂した後の最初の土曜日に開かれる打ち上げ夕食会の費用に充てることを全員が了承しました。この夕食会は、ブラック・ラム・ナイト (Black Ram Night) と呼ばれていました。

罰金リスト

シリング硬貨の大きさほど毛を刈り残した場合 …………… 罰金 6 ペンス
 羊毛半分を刈り残したまま食事休憩に入った場合 …………… 1 シリング
 作業場で羊に逃げられた場合 …………… 6 ペンス

逃がした羊を捕まえようとする仲間に手を貸した場合 …… 6 ペンス
 仲間を嘘つき呼ばわりした場合 …… 6 ペンス
 仲間に対してひどく悪態をついた場合 …… 1 シリング

部屋の隅に置かれたテーブルの上には、羊毛刈り用の真新しい鋏がたくさん並べてあり、使い心地を試しながら好みのもの1つか2つを選び取ると、ブラック・ラムの最後の精算のときに代金を支払うということで各々持ち帰りました。鋏は、重さも違えば、持ち手や刃の長さも実に様々でしたが、価格は1丁3シリング9ペンスと均一でした。

彼らが巡った農場は何れも半径10マイル以内にあり、ひとつずつ次から次へと徒歩で移動していましたが、大抵は、翌朝早くから作業が始められるように、日がな一日羊毛刈りを行った後、4マイルから5マイルほど歩いてその日のうちに次の農場へと移動しておくものでした。農場にとって羊毛刈りの一団の到着は、間違いなく大切な年中行事のひとつでした。準備の行き届いた快適な宿泊設備など期待していたわけではありませんでしたが、農場主は、男たちが眠れるよう、必ず納屋の片方の端に心地好い真新しい小麦の藁——オート麦の藁だと空洞になった茎の中に小さな虫が潜んでいることが多いので——を敷き詰め、片隅にはビールの入った樽を1つ置いておいてくれました。男たちはブーツだけ脱いで、足が冷えないようその上に空の麦袋をかけると、そのままの姿で眠りました。ほぼ野宿のようなものでしたが、実際、彼らは多くを望んではいませんでした。納屋のなかで一日中懸命に羊毛刈りの作業を行った後ですからね。「ひとたび横になって頭を麦藁のなかに沈めりゃあ、あっという間に明日になってた」のだそうです。

翌朝の作業が始めやすいよう、彼らはいつも夜のうちに出来るだけ多くの羊を屋根のある納屋のなかへ入れておきました。雨であろうが夜露であろうが、とにかく湿ってしまうと毛が刈れなくなってしまうからです。空に微かな光が現れるや否や、雌羊たちは子羊を捜してもぞもぞと動き始め、見当た

らないわが子を求めてメーメーと鳴き始めます。

一団にとってはこれが目覚まし時計のようなもので、こうなるのがだいたい午前4時ぐらいのことでした。「さあて。どうやら羊さんたち、支度が出来たらしいぜ。」と、トム叔父さんが大きな声で呼びかけると、男たちは動き始め、ブーツを履いて、少々ぶつぶつ言ったりあくびをしたり、伸びをしたりしながら、馬用の飼葉桶など手近にある水でパシヤパシヤと簡単に顔を洗うと、仕事へ向けて「気合いを入れた」のでした。

即席で結成された荒くれ男の集団ではありましたが、身体の清潔さに関する彼らの標準的な感覚は、当時としては概してとても良好なものでした。もちろん、なかには仲間たちが眉をひそめるような明らかな例外もありました。そんな時代から随分と歳月が流れたある夜のこと、ロドメルのアバガヴェニー・アームズでこんなことに話が及びました。客でごった返す細長い店内には架台式のテーブルが置かれてあり、私たちはその脇に配された背もたれのない長椅子に腰掛けていました。同席していたのは、ジムとその古くからの連れらのシャド、ピーター・ダドニー、ジャック・ゴデンズなど、何れもかつて羊毛刈りで腕を鳴らしたベテランの面々でした。彼らは皆とうに70代を迎えており、昔ともに働いていた頃に比べれば、言うまでもなく動作はゆっくりとされていて、髪は白くまた薄く、顔には多くの皺が刻み込まれていましたが、それでもまだ歌を唄ったり昔話に花を咲かせては笑い合ったりしていました。天井の低い店内は空気がこもって暑く、タバコの煙が充満していて、磨き上げられたテーブルの天板には、ビールで濡れたグラスの底でオリンピックのエンブレムを複雑にしたような模様が出来上がっていました。

「そういやあ、この先のキングストン [訳注 現在正式には Kingston near Lewes] のチャーリー・パトンのおやっさんときたら、こう言っちゃあなんだが、きったねえおっさんだったよな。なんだって30年も足を洗わねえでいたんだか。」

「ああ、あのおっさんかい。まあ、ときどきブーツを履いたまま池んなか

を歩いちゃいたがな。特に夏の暑いときなんかあよ。」

「そうそう。だからよ、どうしても片方を洗わなきゃならねえってことになったときゃ、さぞかし残念だったろうな。」

「へえ。なんでそんな羽目になったんだい。」

「それがよ、いっつも一緒に荷車引いてた馬が後ずさりしてきて、おやっさんの足を踏んだわけよ。で、なんでも指が2、3本折れちまったらしくてよ。医者へ行く前にちよちよいとそっちの足を洗ったらしいぜ。」

さて、羊毛刈りに話を戻すことにしましょう。作業場となる納屋には両側に扉があり、この2箇所が団長と副団長の定位置となっていました。ここにいれば、自らも毛刈りの作業を行いながら、団員たちによって毛を刈られた羊が納屋から出ていくとき、刈られ方が基準を満たしているかどうかを一頭一頭確認することが出来たからです。ほどなく、ありとあらゆる音程で抵抗と戸惑いの声を上げていた最初の羊が、薄暗い早朝の光のなかに、毛を刈られて丸裸にされ、皮をむいたばかりのオレンジのような少々不格好な姿を現すのでした。

一団は、大方2時間おきに作業の手を休め、鋏の刃を研いだり、パイプに火をつけ、腰を下ろしてビールを一杯飲むなどして一息入れました。夕食時には、ちょっとしたゲームに興じることもあり、その勝敗によって、次は誰が樽のところまで全員分のビールを注ぎに行くかを決めていました。全員で大きな輪を作るように床の上に腰を下ろし、足を交差させあぐらをかいて座ると、やがて誰かが、後ろに寝転がるようにして自分の両足を持ち上げ、頭を飛び越して後方の床へと足を伸ばしてつま先をつけ、これと同時に、下に記した戯れ歌のようなちょっとした韻文の1行目を唱えてゲームを開始します。すると、その左にいる人が同じようにして2行目を唱え、次々と続けて、4行目を唱えた人が立ち上がり、納屋の隅に置かれた樽のところへ行って空になった全員分のポット (pot) 【訳註 = jug】 を一杯にして来なければならないのでした。

「さあて行くぞ、おなじみアダムズィーズ・ベルズ、
 お次もおなじみティモシー・タフ、
 なあ、おいらのケツが見えるかい、
 ああ、バッチリ見えてるぜ」。

午後6時頃になると、彼らは「夕食 (bait) [訳註サセックスの方言で、農夫
 が取る午後の軽食を指す。通常は強めのビールとともに供される。]」休憩を
 取りましたが、いわゆる「ジョウ・アンド・アリー」、すなわちパンとチー
 ズという質素なものでしたので、近場に農園や家庭菜園など見当たるような
 場合には、食事の付け合わせにとレタスを1つ2つとラディッシュをいくつ
 かなど、失敬することもあったようです。

食事が終わると彼らは持ち場へ戻り、逆さにしたブッシェル升 (bushel
 measure) [訳註穀類1ブッシェルを計り取るための容器] の上に獣脂蠟燭を
 立て、その明かりを皆で輪になって囲むようにして、遅いときには10時頃ま
 で羊毛刈りの作業を続けました。このように遅い時間までかかってでもその
 日のうちにひとつの農場の仕事をすべて片づけてしまっておけば、次の農場
 へと移動する準備をすることが出来ましたからね。

夜、床につく前には、「一服し」、藁束や積み上げられた空の麦袋の上に腰
 を下ろして、しばしくつろぐこともありました。大きく広げた両膝に両肘を
 ついて掌に顎をのせている者もいれば、納屋の隅に丸めて積み上げられ柔ら
 かに膨らんでいる、彼らにとってはまさに一日の労働の成果と言える羊毛の
 山に、ぐったりした様子でもたれかかっている者もいました。ひとりふたり、
 蠟燭の炎でパイプに火を点け、きつい重めのタバコ、ブラック・シャグ
 (black-shag) [訳註 McClelland 社のタバコ。Sherlock Holmes も作品の
 なかで愛用している。] の煙を燻くゆらせる者もおりましたが、その鼻を突くよ
 うな独特の強い匂いは、この2、3週の間ほぼ毎日、文字通り昼夜を問わず

嗅がされ続けて鼻に馴染んでしまっている羊たちの悪臭と、刈り終えた羊毛の脂っこく噎せ返るような強い臭気を切り裂くように鼻腔へと届きました。最後のビールがひとり1ポイントずつ樽からくみ出され、ポットを片手に、羊毛の巨大なベッドに腰を下ろしたり、贅沢に身体を一杯に伸ばして、明け方から折り曲げたままの姿勢で作業をし続けたせいで真っ二つに割れてしまいそうだった腰を楽にしてやると、たくさんの汗を流した重労働も、罵詈雑言を浴びせられたことも、悪臭を放ついまましい羊たちのことも何もかも忘れ去られ、長かった一日の終わりに、懸命に作業に勤しみ、成果を残し、疲労困憊している男たちだけが味わうことの出来る平穏と充足感が、彼らの心を少しずつ満たしていくのでした。こうなると、人生そう捨てたものでもないと思えたようです。

こんな風に唄い始める者もいました。

「さてさて、単調な日々には辟易したダウンズの羊飼い、
かつてよく歩いた丘へと引っ込んでいたが、
気分転換にと一服入れた。
裕福になりたいわけでも、
国王陛下から富を授かりたいわけでもなかった。
裕福になりたいわけでも、
国王陛下から富を授かりたいわけでもなかった」。

[歌註 ‘Shepherd of the Downs’ の一節]

ひとりまたひとりと、歌の達者な者、気分の乗ってきた者がこれに加わり、随所にハーモニーを加えたり、節々の最後におなじみの心地好い低音を響かせたりしました。かたや、天井を見上げると、蠟燭の薄明かりが微かに差し込んでいた蜘蛛の巣だらけの垂木には、まるでぼんやりとした灰色の幽霊のような姿のメンフクロウが棲みついていたようで、このような光景を驚いた様子で見下ろしていました。もしかしたら耳慣れない音に面食らっていたか

も知れません。

旅程の一番最後の日は、気持ちが高ぶっていますから作業も順調にはかどりました。残された仕事もあと僅かで、ブラック・ラムも給料日も目前に迫っているとすれば、皆の気分は、「竹馬に乗った治安判事ぐらい高く」、気力も一杯に満ちていました。彼らはいつも、最も羊の頭数が多かったロッティンディーン農場で仕事を打ち上げました。午後になると、トミー叔父はジンを1本買って来るようター・ボーイに言いつけ、村の店まで遣いに出しました。当時、ジンは1瓶で半クラウンしていましたが、トミーはこれを、樽に残っていたビールの中に注ぎ込みました。ジムの言葉を借りると、「やつらあ、ありとあらゆる悪ふざけをやった」のだそうです。1頭刈り終えて次に毛を刈る羊を捕まえに納屋の外へ出ていく際、男たちは隣で腰をかがめて毛刈りをしている仲間のすぐ後ろを通っては、押し倒そうとしました。というのも、納屋のなかで羊に逃げられたり、仲間に嘘つき呼ばわりよりさらにひどい罵声を浴びせた場合には、罰金が科せられていたからです。罰金はブラック・ラムの酒代になる決まりで、もし押し倒された男がその両方の規則を破ってしまえば、新たに18ペンスが罰金として団長の帳簿に加算されることとなりますから、これは宴会の酒代を増やすには絶好の機会だったわけです。

この後最初に巡ってきた土曜日の夜、彼らは全員再び本部に集い、団長から給料を手渡されました。手当は20頭につき5シリングの割り当てでしたので、総額で1人当たり60ポンドほどの稼ぎになっていたようですが、そのうちおよそ半分は給金としてすでに支払われていました。刈り手の賃金は週給で18シリングでした。残りのお金は均等に分けられ、罰金は各々差し引かれ、まとめてパブの店主へと渡されて、この夜の食事と飲み物の費用となりました。こうして集められた金額は2、3ポンドに上ることもあったようで、この夜の宴会に供されるたくさんの飲み物——ビールは1ガロンが1シリング4ペンス、ウイスキーはボトル1本で3シリング、ラム酒が1本2シリング6ペンス——や、たくさんのおいしい料理の代金としては充分な額でした。

しばらくすると、テーブルにはソルト・ビーフ〔訳註塩漬けにして熟成した後、熱を加えて調理した牛肉。アメリカやオーストラリアではコーン・ビーフとも称される。〕の大きな固まりや、ハム、パンとチーズにタマネギのピクルスなどが置かれ、こんなごちそうを目の前にして、しかも小銭入れには母親へと持ち帰るソヴリン金貨〔訳註= 1ポンド金貨〕が2、3枚入っている。これで唄わずにいられますか。歌はひっきりなしに続きました。唄うほどに酒は進みましたし、1曲につき1杯飲むというのが決まりでしたから、各々飲んで唄い、唄っては飲むが繰り返されていきました。1曲歌が終わると、しばしば皆で声を合わせてこのちょっとしたコーラスを唄いました。

「サイコーに愉快的歌をサイコーの腕前で唄う
お前^{めえ}らみたいなサイコーの仲間とな
自信があるんなら、さあ歌ってみな、
でも忘れちゃあいけねえぜ。唄えばまた飲みたくなるってことをよ。」
「昔なじみのそのごろつき*¹にビールをやってくれ
もう飲んじまってるぜ、もう酔ってるさ、
けど、昔なじみのあの野郎にもうちよいとばかり飲ましてやってくれ。」
「さあ、バートン*²を半ポイント、
なんてことねえさ、大丈夫、
だから、バートンを半ポイント、な～んてことはねえ、大丈夫さ。
ち～びち～び、行・こ・う・ぜ！」。

〔訳註 ‘Jolly Good Song’ の一節〕

訳註*1 原文では *bounder* だが、本来通常は *bugger* と唄われる。BBC に取り上げられた際など、公の場でこの語を用いるのが憚られたようなときに、語の変更が自主的に為されたとのこと。

訳註*2 ビール醸造で名高い街 *Burton upon Trent* で造られたビール。

テイター・ビア・ナイトや羊毛刈り前後の夕食会、あるいは収穫祭 (*Harvest Homes*) など、男たちの親睦を深める宴会でよく行われていたゲームに、「カッ

ブを空けちまえ(‘Turn the Cup Over’)」というものでありました。ブラック・ラムでは、団長がその進行役となり、フェルト製の縁が広くて深さのある山高帽を手に皆の前に座り、この帽子を順に渡して一人ひとりの力量を試しました。渡された者は、帽子の高くなった部分を上にして両手で縁を持ちます。帽子の一番高いところにはホーン・カップ〔訳註牛の角で作ったコップ。尖った部分は切り落としてあり、置くことの出来る形状のもの。半ポイントが通常の容量。〕が置いてあり、そのなかにはビールがなみなみと注がれていました。これを合図とともに飲み始め、山高帽の上でバランスを保ったまますべてを飲み干せるかどうか、これがゲームの趣旨でした。これを見守る仲間たちは、そのときよくこんな風に唄い始めるものでした。

「言ったっけな、オレはよお、ロンドンに行ったことがあるんだぜ、
 そうそう、ドーヴァーにもな、
 旅して回ってたのさ。わかるかい、世界中をよ
 ぐるっとぐるっとぐるっとぐるっとな。
 その酒、ぜんぶ飲んじまえよ。カップを空けちまえ。」

〔訳註 ‘Turn the Cup Over’ の一節〕

エールをすべて飲み干してしまうと競技者は空になったカップを空中に放り投げ、ひっくり返した帽子のなかにこれを受け止めることになっていました。この歌が終わるまでの間に一連の動作をうまく終えられなかったときには、もう一度最初からやり直さなければなりませんでした。不運にもこんな羽目に陥った場合またさらにエールを飲むことになりますから、この芸当をうまくやり通せる可能性は低くなり、状況はさらに困難なものとなるわけですが、なんとかやり遂げられるまでこれを繰り返すことになっていました。まあ、たまには進行役の裁量で次の競技者が呼ばれることもあったようですね。

このような宴の夜は、かなりのどんちゃん騒ぎで賑やかなものだったようですけれど、決して静いや喧嘩沙汰にはならなかったのだそうです。誰かが

歌を唄うよう求められたような場合には、誰もがじっとその歌声に耳を傾け、室内にはこの上ない静けさが広がりました。そして、全員がコーラスに加わるよう促されると、20人ほどの男たちの喉から発せられる力強い歌声が波となって押し寄せ、小さな部屋の壁を突き破って天高くその歌声を轟かせ、あたかもサセックスの羊毛の刈り手たちは、その仕事ぶりと同じくらい歌の方も誠心誠意、心を込めて歌い上げるのだと世界中に触れ回らんばかりの勢いでした。こんな機会があるおかげで、彼らの人生はより豊かなものになっていたのです。

19世紀が終わる頃、ジムは羊毛刈りを始めましたが、丘を越えて僅か3マイルしか離れていないファルマーのスワン・インで1828年に行われた会合において、ジョン・エルマンが作成した協定の記録文書を調べてみると、面白いことにその後70年ほどの間、羊毛刈りの作業行程は驚くほど変わっていないことがわかります。この仕事は体力を消耗する過酷なものでしたから、羊毛刈りを行う男たちの士気を損なうことがないように、農場主たちは相応の食べ物や飲み物を用意するよう心がけることが大切であることを十分に理解していました。エルマンが記している会合では、刈り手たちの「朝食として冷肉 (Cold Meat) もしくはミートパイと、ひとり1クォートのエール」を供すことが満場一致で合意されていましたし、午前のうちに2回、タバコを吸うことと1回の休憩につき1ポイントのエールを飲んでも良いことになっていました。最も豪華な昼食 (dinner) には、「茹でた肉、ミート・プディングもしくはパイ、好みに応じてアルコール度数の低いビール (small beer)」^[訳註]中世ヨーロッパで醸造が始まり、水代わりに飲まれた。濾過が為されていないどろどろした状態のものもある。と、食後には度数の高いビールをひとり半ポイントずつ」が出されることになっていました。午後にもまた「タバコに火をつける ('light up')」時間が2度設けられており、喉の渴きを癒すために「1度目の休憩には、エールと度数の高いビールを半分ずつ混ぜ合わせた混合ビールがひとり1ポイント、2度目にはエールが1パイ

ントずつ」与えられました。夕食 (supper) は、「冷肉とパンにチーズ」、そして「ひとりあたり1クォートのエールと、食後には度数の高いビールを1パイント」という構成でした。「ビール付きの夕食」には「ゆっくり1時間半が与えられ」ていて、その間については「喫煙と歌は許されていません」でした。

支払われる賃金は、「雌羊、子羊、タグ (Tag) [訳註 = teg] の場合、20頭につき10ペンス」、「去勢した雄羊 (Wether Flock) の場合は20頭あたり20ペンス」といった歩合換算で合意が為されていました。刈られた羊毛の巻き取り代は100頭分で1シリング。そこに3ペンスがブラック・ラム・ナイトのために加算され、団長には1日あたり2シリング6ペンス、ター・ボーイには1日1ペニーの上乗せが為されました。

手当の金額が急激に上がっていったことと、喫煙および歌を唄うことに関して多少規則が緩和されたことを除けば、あとはほとんど何も変わっていません。父たちの時代にもやはりそれは汗まみれのたいへんな作業で、言うまでもなく喉がカラカラに渴く重労働でした。

謝辞

今回も Copper family の面々、就中 Jon Dudley 氏には細かな描写やこの地方特有の事柄など多くの点についてご教示いただいた。記して感謝申し上げる次第である。